

朝
蜘蛛

夜果てぬ

軒端に

キラキラと金色に滯れて

朝蜘蛛よ

蒼ぐろく

むくんだ様に眠る傷痕の町で

昨夜よるの

焼け爛れる様な歴史をひもとく者もなく

ひとときの無爲の上に

朝蜘蛛よ

お前は何を編まうとか

穂
本
純
也

ひとしきり　またひとしきり

聲のない聲の響きが

朝蜘蛛の迷妄にしみわたり

まだをぐらい色町の上をつんざく

しきりなく立ちまごふ残夢の朝靄

夜をこめて悲愁を掩ひ

うすら唾ひに無表情だつたお前

いらか甚にしとどに濡れ

いまし昇る旭光を蒼ざめさせ

残夢の靄——そのうすら唾ひに

なびわひに疲れてか　一點に凝固し

朝氣を吸ひ慰ふ朝蜘蛛の

おゝ

その瞳は

意外なきびしさに冷たく光つてゐた